

東日本大震災後、被災母子を支えた災害ボランティアの回想

宍戸 路佳*¹・久保 恭子*¹・坂口由紀子*²・倉持 清美*³

生活科学分野

(2015年9月16日受理)

1. はじめに

近年災害が多発し、災害に関する多くの研究がなされるようになった。最近の災害に関する研究は、地震や防災に関するものが多くみられる(山本ら, 2015; 中山ら, 2015; 古本, 2014)。筆者らも東日本大震災後より災害に関する調査を行っている(宍戸ら, 2015)。東日本大震災では、福島県は地震、津波、原子力災害と3重の被災を被り、県内にも多くの避難所が開設された。しかし、福島第一原子力発電所の事故によって、被災者は県内だけでなく、他県へ避難を希望した者も多く、これをうけて、全国各地で避難者を受け入れてきた。震災から1年後の平成24年でも福島県から県外への避難者は約6.2万人がおり、平成27年においても約4.4万人が他県で避難生活を送っている(福島県, 2015)。日本は阪神淡路大震災の年をボランティア元年と呼び、その後の災害では全国各地で、被災者への支援、ボランティアに参加する市民が増加している。東日本大震災後も、日本のどの地域においても、震災直後から様々な支援が実施され、ボランティアが活躍していた。ボランティアは、被害状況を報道等で確認し、様々な団体のボランティアの募集に応募し、派遣されたケースや被災地にいるがゆえに半強制的に被災しながらもボランティア活動を余儀なくされたケースなど様々であろう。どのような状況下においても、ボランティアは避難者への支援を短時間で準備をして実施しており、このことは身体的にも経済的にも負担があり、また、慣れない環境での活動は多くの心労を伴うこともあろうと想像する。このた

め、被災者とともにボランティアへの支援も必要であることが指摘されている(重村ら, 2011; 小林ら, 2011)。

筆者らは東日本大震災後(以下、災害後)、福島県から放射線災害をさけ、他県に避難してきた避難者家族をA県で支援してきた。A県は福島県に隣接し、東京電力の関連施設があるため、福島県からの避難者は多い。災害直後は夫婦と子どもという家族単位での避難が目立ったが、その後、父親は福島にもどり、母子は他県で生活するという2重生活をする家族が増加してきた。彼らへの具体的な支援の内容は、私たち医療保健福祉の専門職者と地域における子育て支援団体と連携を行い、災害直後は避難所となっている体育館にて母親の相談相手となる、被災した子どもと遊ぶ、親子ヨガ、ノーバディズパーフェクト(NP)やコモンセンスペアレンティング(CSP)の実施、災害後3~4か月後には生活支援、地域における子育て広場の開催やお誘い、家庭訪問にて家事支援等を行ってきた。支援を行っていた団体は、支援等を専門に行っている団体ではなく、自分達も子育てをしている母親であり、自助グループのような形で活動しているが、震災をきっかけにボランティアとして活動したという経緯がある。先述したようにボランティアを支援する必要性が示唆されているが、実際に活動をしたボランティアの心情については十分に検討されていない。本研究は、災害直後、避難所における母子を支えたボランティアの心情の移行を整理し、今後のボランティア支援のための資料とする。

*1 神奈川工科大学 (243-0292 厚木市下荻野 1030)

*2 日本医療科学大学 (350-0435 入間郡毛呂山町下川原 1276)

*3 東京学芸大学 生活科学講座 生活科学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

2. 対象と方法

2. 1 対象

東日本大震災後、福島からの母子避難者を支援したボランティア女性5名。

2. 2 研究方法

インタビュー調査を実施した。インタビューの内容は、避難を行ったきっかけ、支援を行ってよかったことや困ったことなどを自由に語ってもらった。面接場所はボランティアが活動している場所の1室を使用した。インタビューは、許可を得て、ボイスレコーダーに録音した。データ収集期間は2014年3月～5月である。

2. 3 分析方法

面接内容を逐語録に起こし、対象者が語った内容の意味を損なわないようにしながらコード化を行った。その後、内容の似たものを集め（小カテゴリーとする）、さらにそれを全体の意味がわかるように集め、カテゴリーとした。カテゴリー化をしていくにあたり、随時研究者間で検討を行った。

2. 4 倫理的配慮

調査を実施するにあたり、支援団体の代表に研究の目的、方法、自由意志での参加、秘密の厳守等を口頭及び文書で説明し、支援に関わっていた方の紹介をいただいた。その後、研究の対象者となる支援に関わっていた方へ、研究の目的、方法、自由意志での参加、秘密の厳守等を口頭及び文書で説明し実施した。

3. 結果

3. 1 対象者の概要

対象者は20代～50代の方5名で、1名は未婚、4名は既婚者であり、4名は子どもを有し、乳幼児の子育て中が1名、中学生～未成年の母親2名、子どもは成人しているという方が1名であった。

ボランティア活動の内容は、子どもの保育、見守りを主にしている方が3名、母親との会話やイベントを企画し実施している方が2名であった。対象者は、1名は保育について学んだ経験はあるが、特別な資格は全共有していない。

3. 2 ボランティアの心情の変化 (表1)

4つのカテゴリーが抽出された。以下カテゴリー

を【 】, 小カテゴリーを< >, コードを「 」でしめす。

3. 2. 1 【手探りで始めた支援】

このカテゴリーは「避難所があると知って、乗り込んでいって無我夢中で始めた」というようなく自ら始めた支援>と「避難所になるから支援すると聞いてやろうと思った」のようなく得られた支援のきっかけ>から成り立っていた。

3. 2. 2 【どうしたらよいか、わからなかったママ支援】

「自分が発した言葉で傷つけてしまうのではないかって怖かった」, 「ママたちとどんな会話をしたらよいかわからなかった」, 「ママたちの抱えているものが重い気がして怖いとか難しいと思った」などの<かまえてしまい難しいと感じたコミュニケーション>や「支援する中で支援者の心の持ち方をどうしたらよいのだろうかと思った」「何を困っているとはっきりしたものではなくもっと複雑なのだと思ったら戸惑った」などの語りから<関わる中で感じた支援者としての戸惑い>を感じていた。

3. 2. 3 【支援する中で感じた喜び】

「子どもは言葉にならない代わりに子どももママのことをきにしている感じがあった」, 「なんとなくママを癒そうとおもっているのかちょっとしたしぐさに思いやりがある感じがした」などのようなく伝わってきた子どものママへの思い>や「子どもの保育をして叱ってもまた子どもから来てくれてうれしかった」, 「子育てだけでなく、私もできることがあるのだと思えてうれしかった」などの<うれしかったママと子どもの思い>から成り立っていた。

3. 2. 4 【続けていきたい支援】

「いろんなことを聞いても行きたくないとかそういう気持ちはなく続けていきたい」, 「やめたいつらいと感じたことはなかった」というようなく感じたことのない、やめたいという思い>があった。また「被災のこの話をするよりも日常会話のほうが良いときいたのでそういうのも大切だとおもった」「たわいもない会話も気分転換になってよいのかなとおもった」などの<支援の中できづいた自分達の行ってきた支援の意味>を見出し、「地元の方とも交流できるような支援が必要だと思った」, 「行政ではなく、民間だからできる自由で人に寄り添った支援を考えたい」などの<こ

表1 災害ボランティアの回想

カテゴリー	小カテゴリー	コード
手探りで始めた支援	自ら始めた支援	避難所があると知って、乗り込んでいって無我夢中で始めた
	得られた支援のきっかけ	避難所になるから支援すると聞いてやろうと思った 各地からの支援物資が送られてきているのを見て自分も何かしたいと思った 自分が発した言葉で傷つけてしまうのではないかと感じて怖かった 通常のコミュニケーションよりも相手を傷つけてしまわないかと思った ママたちとどんな会話をしたらよいかわからなかった
どうしたらよいかわからなかったママ支援	かまえてしまい難しいと感じたコミュニケーション	いつもは夢とか未来の話ママたちとしているが、そういう話を聞いてよいかわからなかった 放射能についての悩みが多くどんな会話をしたらよいかわからなかった 話をしても何も知らない自分に戸惑いと驚きがあり会話に戸惑った ママたちの抱えているものが重い気がして怖いというか難しいと思った ママたちの抱えているものが重いのでひたすら聞くことしか出来なかった
	関わる中で感じた支援者としての戸惑い	支援する中で支援者の心の持ち方をどうしたらよいのだろうかと思った 子ども達の津波遊びや現在の状況を子どもから聞くと戸惑った 普通なら友達としての会話の中でできる内容も改めて相談という形で聞かれると切ない気持ちになった 何を困っているとはっきりしたのではなくもっと複雑なんだと思ったら戸惑った 外に出られないと聞いて、施設などを紹介してもつながらないともう入り込まないほうがよいのかなと思った 本当に言葉はいらないのかなと不安だった 深い話をきいてもどう返事をしたらよいかわからなかった
支援する中で感じた喜び	伝わってきた子どものママへの思い	子どもは言葉にならない代わりに子どももママのことをきいている感じがした なんとなくママを癒そうとおもっているのかちょっとしたしぐさに思いやりがある感じがした 子どもは良くママのことをみているなどおもった 子どもなりにママの気持ちを察しているのかなと接していて言動から感じた 子どもの保育をして叱ってもまた子どもから来てくれてうれしかった
	うれしかったママと子どもの思い	みんな一生懸命生きている感じが伝わってきて家族みたいになってきた 硬い表情のママがイベントを進める中で笑顔になったことがうれしかった ママと子どもに顔や名前を覚えてもらえてうれしかった 子どもから手紙をもらえてうれしかった 子育てだけでなく、私もできることがあるんだと思えてうれしかった 一人の女性、ママとして寄り添ったりできることがあると思えた。
続けていきたい支援	感じたことのないやめたいという思い	いろんなことを聞いても行きたくないかそういう気持ちはなく続けていきたい やめたいくらいと感じたことはなかった 被災のこの話をするよりも日常会話のほうが良いときいたのでそういうのも大切だとも思った たわいもない会話も気分転換になってよいのかなとも思った 何をのぞんでいるかわからず支援してきたが、途中で把握できるようにしたらよかった 何かしてあげようというのではなく、支援する側も心を開いて接しないとダメだと思った
	支援の中できづいた自分達が行ってきた支援の意味	ちょっとした会話ができるような場が必要だと思った 支援する側の環境を整えながら支援することも支援には必要だと思った 小さい子が多いと見守りや保育が必要と思うが、異年齢が多い避難所こそ危険も伴うので見守りも必要だと思った 小さい子は大きい子の真似をするので保育は必要だと感じた 保育をするときは、親は子どもの言動がすぐ気になるので、子どもが注意されると親も気になるから否定をしない言葉かけを子どもにもすることが大切だと思った 地元の方とも交流できるような支援が必要だと思った 行政ではなく、民間だからできる自由に人に寄り添った支援を考えたい
	これからしていきたい避難者との関わり方	一人の女性、母親になれる時間が持てる場所にしたいと感じた つながりから心の棚卸ができる場所になればよいと思う 子どもとちょっと離れる時間が持てる場所があるとよいのではないか 困ったときに頼れ、子どもの預け場所など情報が得られるような支援をしたい

れからしていきたい避難者との関わり方>から成り立っていた。

4. 考察

今回の支援者は、自分たちの生活圏内に避難所ができたということで、だれから依頼されたわけでもなく、災害直後から手探りで支援を始めていたことがわかる。東日本大震災は、発生直後からテレビや新聞、ラジオ等により、被害の大きさを伝えていた。一方、私たちの多くは大きな災害であるにも関わらず、短時

間で必要最低限の支援ができていないことを感じていた。また、東日本に在住していれば、被災当日は、東北から離れた東京、神奈川、埼玉でも大きな揺れを感じ、交通機関がマヒして多くの帰宅困難者が発生した。その後も地震の影響により、ガソリンや食料品の不足等で、首都圏でも日常生活に大きな障害を被ったのは記憶に新しい。このような背景から、国民の誰もが被災者に何らかの支援を提供したいと考えたのはごく自然なことであったと思われる。今回の対象者らは、平時に地域で行っていた、子育て期の母親の安寧に効果的な支援を避難母子に提供したが、彼らの反応

を見ると、ボランティアが期待したほどの効果は見られず、このことでボランティアは支援の難しさを感じていた。

瀬藤 (2013) によると被災者は「心のケア」への抵抗感があること、コミュニティや家族間でのいざこざに対し何をしてあげれば良いのかと悩む支援者もいたということが報告されている。本調査の結果も瀬藤 (2013) の先行調査と同様であった。

今回、語っていただいたボランティアは、どうしたらよいかという戸惑いの中でも、【支援する中で感じた喜び】のように子どもや母親とのかかわりの中から喜びを得て、自分自身にもできることがあるという活力を見出していた。このような体験とともに、支援内容を振り返ったり、自分達が行ってきた支援の意味を振り返り考えることで、＜支援の中できづいた自分達が行ってきた支援の意味＞のように自分達のしていることに客観的に意味づけを行っていた。こうしたことがボランティアの自己効力感やエンパワメントの向上につながったのではないかと考える。今後、ボランティアの心情や悩みを支援する役割を担える人材やボランティア同士のサポートのシステムが必要である。

今回、支援者が、子育て中もしくは子育て経験者であり、避難地域に居住している方であった。支援者としては、【どうしたらよいかわからなかったママ支援】という思いはあるだろうが、逆に無理に話を聞かなかったことや、自分達が地元の住民でありすぐになくなるボランティアではないということが避難者との関係でピアサポートのような状況となり、【支援する中で感じた喜び】や【続けたい支援】ということになったと考えられる。久村 (2014) は、支援者がHAPPYでなければ支援活動は続かず、「支援に行きたい」という単純な動機が大切であると述べており、今回の支援者はこのような状況に合致していたと考えられる。支援を続けたいという支援者としての思いも大切にしながらも、不安や戸惑いを感じる時期を支えるため、定期的に支援の振り返りをする報告会や学習会を実施する体制を整えることも大切であると考えられる。

5. おわりに

今回の調査は対象者が少なく、多くの支援者に当てはまるとは限らない。しかし、いつおこるかわからない災害に備えて、災害に関する動向として被災者だけの支援にとどまらず、多方面から支援のあり方を検討していく必要がある。

最後に今回調査にご協力をいただいた方々にここより感謝いたします。

文献

- 福島県 (2015)：県外への避難状況と推移 (最終閲覧日：2015年9月8日), <http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/129284.pdf>
- 古本尚樹 (2014)：東日本大震災被災自治体における保健・医療・福祉活動について 大槌町役場保健師への聞き取りから, 日本集団災害医学会誌, 19(2), 168-174.
- 久村正樹 (2014)：災害時に心療内科医に求められる役割 災害時支援者の精神的健康を保つために 適切な支援体制とは, 日本心療内科学会誌, 18 (3), 149-151.
- 小林恵子他 (2011)：災害支援活動を行った看護職者のストレス反応と関連要因, 日本災害看護学会誌, 12 (3), 47-57.
- 中山杏奈他 (2015)：継続した被災地でのボランティア活動が現地の人々や看護学生に与える影響, 日本看護学会論文集 看護教育, 45, 71-74.
- 瀬藤乃理子他 (2014)：東日本大震災の被災地における支援者のストレス 発災1年半後の状況, 産業ストレス研究, 21 (3), 271-277.
- 瀬藤乃理子他 (2013)：視察報告：被災地の支援者支援の課題—被災地での遺族支援活動の中でみえてきたもの—, 甲南女子大学研究紀要, 7, 49-55.
- 重村淳他 (2011)：東日本大震災における救援者・支援者 支援に向けた課題, トラウマティック・ストレス, 9 (2), 141-147.
- 宍戸路佳他 (2014)：A県保育専門職者の防災、災害に関する意識, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ 第66集, 349-356.
- 山本愛美他 (2015)：災害時要援護者である小児および障がい者を持つ保護者の防災意識に関する調査, 小児歯科学雑誌, 53 (3), 373-382.

東日本大震災後、被災母子を支えた災害ボランティアの回想

Review of feelings of volunteers who supported disaster-affected mothers and children after the Great East Japan Earthquake

宍戸 路佳*¹・久保 恭子*¹・坂口由紀子*²・倉持 清美*³

Mika SHISHIDO, Kyoko KUBO, Yukiko SAKAGUCHI and Kiyomi KURAMOCHI

生活科学分野

Abstract

[Purpose] This study aimed to review the change in feelings of the volunteers who worked for supporting mothers and children evacuating after the Great East Japan Earthquake (2011) and provide the materials for supporting such volunteers.

[Methods] Interview survey

[Results] The volunteers' feelings were extracted from the interviews with five female volunteers who supported the mothers and their children evacuated from Fukushima after the Great East Japan Earthquake. The change in their feelings was found and their feelings were classified into the following four categories: They [felt helpless when started the support activities], and they [didn't know what to do for disaster-affected mothers] while they [took pleasure in their support activities], and then [wanted to continue the support activities.]

[Consideration] For respecting the volunteers' feeling that they would like to continue the support activities, it is also important to arrange the system for supporting the volunteers, for example, by regularly holding meetings to review, report and study the support activities to eliminate their worries and confusions.

Keywords: disaster, mothers evacuating only with their children, volunteers working after disaster

Department of Human Life Studies, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

*1 Kanagawa Institute of Technology (1030 Shimo-Ogino, Atsugi-shi, Kanagawa, 243-0292, Japan)

*2 Nihon Institute of Medical Science (1276 Shimogawara, Iruma-gun, Moroyama-machi, Saitama, 350-0435, Japan)

*3 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

要旨: 【目的】 災害直後、避難所における母子を支援したボランティアの心情の移行を回想し、今後のボランティア支援のための資料とする。

【方法】 インタビュー調査

【結果】 東日本大震災後、福島からの母子避難者を支援したボランティア女性5名。ボランティアの心情の変化として4つのカテゴリーが抽出された。【手探りで始めた支援】を始め、支援を始めたが、【どうしたらよいかわからなかったママ支援】という思いと同時に【支援する中で感じた喜び】もえられ、これからも【続けていきたい支援】という思いでいた。

【考察】 支援を続けたいという支援者としての思いも大切にしながらも、不安や戸惑いを感じた時期もあるため、定期的に支援の振り返りや報告会、学習会をするなどボランティアを支える体制を整えることも大切であると考え。

キーワード: 災害, 母子避難, 災害ボランティア